Spiritualism News Letter

2002
第１８号
7月1日発行

スピリチュアリズム・ニュースレター

発　行／スピリチュアリズム・サークル　心の道場
発行人／小池里予
〒441-3147愛知県豊橋市大岩町字火打坂18
ＴＥＬ 0532-41-0537　ＦＡＸ 0532-41-8257
ホームページアドレス　http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/

今号の内容

・**高級霊界通信を決定する条件**　高級霊の通信に見られる13の共通点……1
・**スピリチュアリズムから見た『神との対話』**典型的な低俗チャネリング……8
・**２つのＴＶ番組を見て**“たけしのＴＶタックル”と“ここが変だよ日本人”……11
・**シルバーバーチの故郷を訪ねて**……21

高級霊界通信を決定する条件
高級霊の通信に見られる13の共通点

世の中にはさまざまな霊界通信がありますが、その中で真に霊的価値があるものは、ほんの一部に限られます。大半の人々は霊からの通信の真偽(しんぎ)を判断することができないために、偽物の霊界通信にまんまと騙(だま)されています。霊界通信の真偽の見極めは、「霊的真理」を知ったスピリチュアリストにおいて初めて可能となります。

今回は、高級霊からの霊界通信には、どのような特色があるのかを見ていくことにします。高級霊の霊界通信に共通する特徴を明確にすることによって、霊界通信に対する判断力がさらに飛躍するはずです。より高いレベルの視点を身につけることによって、それ以下のレベルの通信の全体を見通せるようになります。当然のこととして、低級霊からの通信・程度の悪い通信も簡単に見破ることができるようになるでしょう。

ここでは、高級霊の通信の特徴・共通性を、13の項目にリストアップして学ぶことにします。

1　語られる内容が、スピリチュアリズムの「基本的な真理」と100％一致している

高級霊からの通信内容は、スピリチュアリズムによって示された「基本的な真理」と完全に一致し、食い違いがありません。高級霊が、霊的事実と決定的に異なる内容――例えば原罪説・贖罪説・悪魔サタンの存在・キリストの肉体再臨・一人の救世主の出現・終末の天変地異の予言・間違った因果応報説・間違った輪廻再生説などを語るようなことは決してありません。

「基本的な真理と食い違うことは絶対に言わない」ということが、高級霊の通信であるかどうかを判断する明確な目安となります。この際、注意を要するのが、通信内容の中に部分的に、基本的な真理と一致しないものが含まれている場合です。たとえそれが全体の５％というようなわずかなものであっても、見過ごしてはなりません。

こうした通信は、迷わず“低級霊”からのものであると判断して間違いありません。低級霊は、わざと霊的真理を語り、地上人を信用させようとしますが、通信内容のすべて100%を霊的真理に添わせることはできません。霊界通信に対する鋭い鑑識能力は、まさにこの点で必要とされます。

2　通信内容が一貫して、「地上の魂の成長」を目的としている

高級霊からの通信は、常に「地上人の魂の成長」を最大の目的としています。単なる知識を伝えることより、地上人の霊性向上に役立つ教訓を与えることを優先しています。したがって高級霊の通信では、霊的成長にとってどちらでもいいようなテーマ、好奇心や軽薄な興味の対象となるようなテーマ――例えば守護霊の名前・前世の身元・宇宙人・アトランティス・天変地異などを真っ先に取り上げるようなことはありません。

それどころか地上人の関心が霊性向上とは無関係な方向にそれると、注意を促して肝心なテーマに戻そうとします。言うまでもないことですが、宝くじや馬券など物質的な欲得に関係した質問には、一切答えません。このように高級霊からの霊界通信には、常に地上人の魂の成長についての配慮が一貫して見られます。

これに対して低級霊の通信では、地上人の欲望・好奇心を煽るような内容ばかりが目につきます。地上人の低俗な興味から発せられる質問について長々と自説を並べ立てたり、霊的成長とは無関係な日常生活における物質レベルの問題をさかんに取り上げます。

3　常に「全人類に語る」というスタンスが貫かれている

高級霊の通信には、常に「地球上の全人類に向けて真理を語る」という姿勢が貫かれています。全人類に共通する問題を優先して取り上げています。状況に応じて、地上人からの個人的な質問に答えることもありますが、その場合も必ず、人類全体に向けてメッセージを送るというスタンスが意識されています。地上世界で多くの争いを引き起こす原因となるのが民族意識ですが、高級霊からの通信には、特定の民族だけを擁護するような内容は見られません。

個人向けのメッセージが中心で、「人類の霊的成長」という肝心な点に焦点を合わせていない通信は、高級霊からのものではないと思って間違いありません。

4　通信内容が、上層からの厳格なコントロール下に置かれている

本物の霊界通信は、語られる内容が、常に上層の高級霊界の厳しいコントロール下に置かれています。人類全体に対する計画の中にあって、地上人類に示される霊的真理の内容が厳密にチェックされています。高級霊の通信になればなるほど、これまで地上人類が知ることのなかった最前線の情報を地上世界に伝えることになりますが、その際、地上人の霊性に見合った内容だけを語ることが許されます。地上人の霊性が至っていない霊的事実については、勝手に語ることはできません。

高級霊の通信には、このようにより高い霊界からのコントロールがなされています。「地上人の霊性にふさわしいかどうか」という厳格な条件をクリヤーしたものだけが、地上にもたらされているのです。高級霊界には厳然とした秩序があり、好き勝手な行動をしたり、自由気ままに真理を語ることは許され

ません。それによって高級霊界の計画は完全な統制のもとで進められ、イエスを中心とする神庁の意志は、末端に至るまで正確に反映されるようになっているのです。

それに対して低級霊の場合は、何の規制もないため、いい加減なことを好き勝手にしゃべっています。この点において、高級霊と低級霊の通信は根本的に違っています。

5　道具意識に徹する謙虚さが見られる

高級霊は、自分が上層の霊界からの指示下にあり、その道具であることを表明します。より高い霊の許可のもとに真理を語らせていただいているという謙虚さが、常に見られます。こうした「道具意識に徹する謙虚さ」は、高級霊に共通する特徴となっています。自己主張して自分を前面に出すというようなことは、決してありません。

高級霊は、自分が上層の霊界の道具であることを誇りとし、心の支えとしています。通信の中に「自分はさらに高い霊の道具として働いているに過ぎない」「自分はイエスの指揮下で働いている」といった内容が述べられている場合は、信頼のおける通信と判断して間違いありません。

それとは逆に、とうとうと自分自身の考えを語り、自己主張するような霊は、低級霊と判断すべきです。徹底して謙虚であること、そして上層の霊界の道具であることの自己表明こそが、高級霊の証（あかし）なのです。高級霊は謙虚で、低級霊は傲慢・尊大です。低級霊は自分を前面に出し、自分を誇り、語り口調も高圧的です。

6　理性を用いた吟味を重要視している

高級霊は、地上人に対して、通信内容を理性を用いて吟味するように仕向けます。霊界通信の内容を鵜呑みにすることを厳しく戒め、低級霊の通信によって自己を見失うことがないようにとの配慮をします。高級霊は、理性によって正しいと判断したものだけを受け入れるように勧めるのです。

霊性がある一定のレベルにまで至っていない人の場合には、理性の判断に従うことで、高級霊の示す内容を拒否するような結果を招くことがあります。そうした時でも高級霊は、地上人が現時点の霊性のレベルにおいて、理性的に納得できるものだけを受け入れるように仕向けます。今は理解できない内容も、やがて霊的に成長すれば、おのずと理解できるようになることを知っているからです。

このように高級霊は、各自の霊的レベルに見合った真理の理解を尊重し、自然で無理のない霊的成長のプロセスを歩ませようとします。「納得できなくても自分を信じよ」と頭ごなしに命令するのは、低級霊の特徴なのです。どこまでも高級霊は、地上人の「理性的判断」と「自発性」を重要視し、これを最大限にまで尊重します。

7　まじめな質問に対しては、誠心誠意で答える

高級霊は、地上人の不まじめな質問、ふざけ半分の質問、あるいは単なる好奇心レベルの質問に対しては、まともに答えることはありません。質問者の心の動機を見抜いて相手にしません。それとは反対に、まじめな質問に対しては、たとえそれが未熟なレベルのものであっても、常に誠心誠意を尽くして答えようとします。特に霊的成長に係わるまじめな質問を歓迎し、これを決して無視するようなことはありません。もちろん高級霊にも答えられないこと

はありますが、その場合は、「自分には分からない」とはっきり言います。また地上人に語ってはならないことについては、その理由を誠意をもって説明します。

高級霊はどのような難しい質問・批判的な質問を投げかけられても、決して怒るようなことはありません。低級霊を見破る方法の一つは、相手に霊的真理についての難解な質問――例えば類魂や再生についての質問をしてみることです。もし、その答えに霊的真理との食い違いが見られたら、その点を詰問するのです。低級霊ならば、やがて苛立ち、そのうちに怒り出すようになります。

8　地上人が理解しやすいように、常にシンプルで分かりやすい話し方をする

高級霊は、常に可能な限りシンプルで分かりやすい説明を心がけます。高級霊の通信には、解釈に苦しむような曖昧（あいまい）でいい加減な内容はありません。地上には、わざわざ複雑な表現をしたり、屁理屈を言ったり、難解な言葉を用いて権威づけを計るような人間がいますが、それと同じようなことをするのは“低級霊”に限られます。特に知性的ではあっても霊性が低い霊からの通信は、取り上げるテーマが地上世界と似ており、使用する用語も難解で複雑なものとなっています。

9　地上人の不安をかき立てるようなことは一切言わない。安心とリラックスを与えようとする

高級霊は、予言じみたことを大袈裟に語って、地上人に不安を抱かせるようなことは一切しません。聞く者に混乱を引き起こしたり、動揺を与えるだけの馬鹿げた未来予知や占星術を繰り出すのは、低級霊の得意とするところです。

高級霊はいつも、地上人が混乱したり余分な心配をしないように最大限の配慮をします。高級霊は、地上人にとっての最大の敵は不安感や取り越し苦労であることを強調し、常に神の導きを信頼し、リラックスした姿勢で人生を歩むように仕向けます。低級霊が不安と恐れを植え付けようとするのに対し、高級霊はいつも、「安心」と「リラックス」を与えようとするのです。

10　霊性・人格性の優れた「専属霊媒」がいる

高級霊の霊界通信は、長い期間をかけて育てた専属の霊媒を通じて送られてきます。高級霊になればなるほど、地上的要素がなくなり、物質世界との接触そのものが困難になります。そのために大変な時間を費やして、媒介の役目を果たす専属霊媒を育て上げることが必要となります。こうした手塩（てしお）にかけた霊媒がいない限り、高級霊は地上に通信を送ることはできません。シルバーバーチは、霊媒が胎内に宿る前から準備を開始してきたことを明らかにしています。このように霊界サイドで十分な時間をかけて準備した「専属霊媒」がいることが、高級霊の霊界通信の特徴なのです。

霊性の低い霊能者を通じて、高級霊が通信を送ってくることはありません。高級霊の通信は、霊性・人格性ともに優れた霊媒によってのみ送られてきます。したがって霊媒の人格性や生活態度を見れば、通信霊の霊的レベルを知ることができます。（『不滅

の真理』84 頁参考）

また高級霊は――特定の専属霊媒以外には通信を送らない」「その霊媒が死んだ後は、別の霊媒を通じて現れることはない」という表明をするのが普通です。この言葉には、専属霊媒を養成することの大変さが、よく示されています。ですから専属霊媒の死後、同じ高級霊を名乗る別の霊界通信が現れるとするなら、それはすべて偽物ということになります。地上人の求めに応じて、次々と複数の霊を降ろすような霊媒を通じて、高級霊が通信を送ってくることは滅多にありません。

11　霊媒の潜在意識の混入がない

霊媒を介しての通信では、大なり小なり霊媒の影響を受けることは避けられません。霊媒の身体とエネルギーを使い、また霊媒の潜在意識にある単語と発声器官を用いること自体が、すでに霊媒の影響下にあることを意味しています。

しかし優れた霊界通信では、霊媒の言葉（単語・表現）と発声器官は用いますが、思想はすべて通信霊自身のものとなっています。シルバーバーチは自ら――「今では 100％自分の考えを、この霊媒を通じて表現することができます」と言っていますが、これは実は「霊言霊媒現象」としては、まさに奇跡的なことなのです。こうした特別な状況を実現するために、長い期間をかけて「専属霊媒」を育て上げてきたのです。

さて、地上の霊媒（チャネラー）の潜在意識の中に、霊媒自身の強烈な主張や意見が内在していると、それがトランス状況下では、自動的に発現されるようになります。そうなると通信霊は、霊媒の潜在意識を十分に用いることが困難になります。そこで通信霊はとりあえず、それらの意見・主張を吐き出させ、潜在意識を使いやすい状態にもっていきます。こうした一連の操作によって吐き出された霊媒の意見は、外部の人にはまるで霊界からの通信のように映るのです。霊媒が知識欲旺盛でいろいろな本を読み漁っているような場合には、特にそうした傾向が強くなります。言うまでもなく霊媒を通して語られる内容は、霊界からの通信ではありません。

私達が霊界通信に触れるときには、通信内容に、どの程度まで霊媒（チャネラー）の潜在意識が混入しているかをチェックしなければなりません。アメリカのチャネリングを見ると、あまりにも霊媒の潜在意識内の知識が混入していることが分かります。時には（ex. バシャールなど）、通信内容の大半が霊媒の知識に他ならないといったものも見受けられます。

少し注意すれば、わざわざ霊界通信でなくともその程度の情報なら、あちらこちらに出回っている本から入手できるということに気がつくはずです。ところが困ったことに、潜在意識の関与を見抜くことができない地上人は、それを進化した宇宙人や霊からの通信のように思い込んでしまうのです。

また低級霊とのコンタクトを安易に許してしまうような程度の悪い霊媒（チャネラー）の場合には、低級霊が意識的に霊媒の潜在意識に内在する低俗な思想を利用することになります。そして、いい加減なストーリーをつくり出し、通信として語るのです。この時、霊に利用される霊媒は、自分自身の潜在意識が悪用されていることには全く気がつかないのが普通です。そのため霊媒自身も、それを本当の霊界通信と錯覚してしまうことになるのです。

12　通信霊が、スピリチュアリズムの指導的立場にある

通信霊が高級霊である場合には、必ずスピリチュアリズムにおける指導者的な立場に立っています。霊的真理を地上世界にもたらすという使命を果たすために、一群の霊団を率いて任務に当たっています。

地上世界に霊的真理を示すというスピリチュアリズムの最も重要な役割は、特別な立場にある高級霊においてのみ許されることです。したがって通信霊が、「スピリチュアリズムの中で責任的立場・指導的立場に立っている」ということが、高級霊であるかどうかを判断する一つの目安となります。霊界のヒエラルキーにおける自らの立場を表明することは、高級霊以外には許されていません。デタラメばかり言っている低級霊も、スピリチュアリズムに関係する霊的立場を偽ることはできないのです。神の遠大な計画について語り、その様子を地上に伝えることが許されるのは、ごく一部の高級霊においてだけです。特別な指導的立場に立ってこそ、霊界の大事業の全体について語る資格が与えられているのです。

霊界のヒエラルキーでのポジションは、その霊の霊格によって自動的に決定されます。霊界では“霊格”という魂の成長レベルが、上下の位置を決定します。ですからスピリチュアリズムの大プロジェクトにおいて指導的立場が与えられているということは、その霊の霊的高さをそのまま示していることになります。特に、シルバーバーチ霊やインペレーター霊のように、年に2度、神庁で開かれる審議会に参加する資格が与えられているということは、高級霊の中においても、さらなる高級霊であることを意味しています。

スピリチュアリズムは、全霊界をあげて進められている大プロジェクトであり、すべての高級霊は一人の例外もなく、そのために働いています。スピリチュアリズムに係わりのない高級霊は存在しないのです。もしある霊が、スピリチュアリズムとは無関係であるかのような発言をするならば、その霊は低級霊であることを意味しています。アメリカのチャネリングには、イエスを中心とする霊界の高級霊の組織について言及しているものはほとんどありません。その理由はそれらの通信霊が、スピリチュアリズムについて語る資格を持っていないからなのです。それを語ることが許されるほどの高級霊ではないということなのです。

自ら高級霊のような振る舞いをする霊に対しては、スピリチュアリズムについての見解と、その中における使命を問いただすのがよいでしょう。それは低級霊にとっては最もいやな質問です。たとえ末端であってもスピリチュアリズムのために働いている霊ならば、そうした質問には、正しく答えなければならない義務があります。

また“バシャール”のように、地球全体の霊的進化に責任を持っているスピリチュアリズムの存在に触れることなく、“宇宙連合”という組織があって、それが地球へ働きかけをしているかのような言い方をするチャネリングがあります。こうした霊界でのスピリチュアリズムの動きを無視したチャネリングなどは、低級霊の悪質な通信、あるいはチャネラー自身のフィクションと判断して間違いありません。

13　神と摂理だけを、信仰の対象としている

高級霊は、特定の人物や霊に対する崇拝を促すようなことは絶対にありません。神と神の摂理・法則に対する以外の信仰や服従は決して勧めません。シルバーバーチは霊界あげてのスピリチュアリズム・プロジェクトの司令官がイエスであることを明らかにし、「イエスに会うことが最大の喜びである」と述べています。しかし､そのシルバーバーチ自身が、「イエスを信仰の対象にしてはならない」と厳しく戒めています。崇拝の念は“神”にのみ向けるべきであり、イエスではないと強調しています。

そうしたシルバーバーチの姿勢と比べ、対照的なのが低級霊です。自分自身がさも神になったかのごとく尊大に振る舞い、自分を崇拝せよと言わんばかりの傲慢な態度をとり続けます。

それに輪をかけて悪質なのが、幸福の科学などの新新宗教に見られる、ニセの霊界通信を意図的につくり上げ、教祖のカリスマ確立や権威づけに利用しようとするやり方です。この場合は、単なる低級霊のイタズラとは比較にならない大きな霊的犯罪を犯していることになります。

真の高級霊界通信に値するものは何か？

以上1~13まで、高級霊の霊界通信に共通する内容を見てきました。現在の地球上でこうしたすべての条件を完璧に満たしている霊界通信は――『シルバーバーチの霊訓』とインペレーター霊による『霊訓』を除いてはありません。『霊の書』は、厳密な意味ではシルバーバーチやインペレーターの通信ほどには条件を満たしておらず、完璧性の点で少々問題があります。

また、これら「三大霊訓」ほど質的に高いものではありませんが、良質の霊界通信として――『ジュリアの音信』『ブルーアイランド』、そして『マイヤースからの通信』あるいは『セス』などの良質なチャネリングをあげることができます。「三大霊訓」と比べると内容的には格段の差がありますが、霊的世界を人類に知らせる上で大きな役割を果たしており、その意味で、やはり人類にとっての福音であると言えます。

霊界通信のレベルに対する判別力を、身につけましょう

以上述べた1~13の項目と照らし合わせることによって、世間に出回っている霊界通信や宗教教義の霊的レベルを、的確に判断することができるようになります。霊的レベルの判定は、自らがより高い霊的な判断基準を持つことによってのみ可能となります。霊的に高い視点を持ってこそ、それ以下のものを､正確に見極めることができるようになるのです。

さて、私達がスピリチュアリズムに導かれ、運よく最高レベルの霊界通信に出会えたということは、他の霊界通信や宗教教義に対する明確な判別力を持ったことを意味しています。地上世界における最も正確な判断基準を持ったということです。世間一般の人々を騙すニセ霊能者やニセ霊界通信に対して、それを鋭く見抜く鑑識力を身につけたということです。

霊的真理を手にした私達スピリチュアリストの使命は、真理と照らし合わせることによって、偽物や不正が横行できないように監視していくことなのです。

スピリチュアリズムから見た『神との対話』
典型的な低俗チャネリング

これまで何人かの方から、『神との対話』についてのご質問を受けております。『神との対話』に対する、スピリチュアリズムの見解はどのようなものかということです。今回のニューズレターでは「霊界通信の判別方法」について学びました。丁度よい機会ですので『神との対話』を取り上げて、スピリチュアリズムの観点から検討してみたいと思います。

久しぶりのヒット・チャネリング

『神との対話』は――1992 年の復活祭の日に、アメリカ人チャネラーであるニール・ドナルド・ウォルシュが、神に宛てて怒りの手紙を書くところから始まっています。すると自動書記の形で、神からの返事が届き、そこからニール･ドナルド･ウォルシュと神との対話が繰り返されることになります。その一連のやり取りが、『神との対話』という本にまとめられたのです。この本の中の神は、まるでこの世の人間が語るようなタッチでユーモアやジョークを交え、気軽に話しかけています。

『神との対話』は全米で大ベストセラーとなり、世界 42 カ国で翻訳され、日本でもベストセラーとなりました。1980 年代を通して一世を風靡（ふうび）した感のあるチャネリングは、1990 年代に入って下火となりましたが、『神との対話』は久しぶりのヒット･チャネリングとなりました。

人為的につくられたベストセラー

では、この『神との対話』はスピリチュアリズムの観点から見たとき、どのように判断したらよいのでしょうか。『神との対話』は、本物の霊界通信（チャネリング）、霊的に高い通信と言えるのでしょうか。

結論を言えば、「霊的真理」を理解している人ならば、初めから偽物と簡単に断定できる代物（しろもの）です。かつての幸福の科学のデタラメ霊言集ほどではないにしても、まさに「典型的な低俗チャネリング」と言うべきものです。本物の霊界通信に触れたことのある人には､到底読むに堪えられないものなのです。

なぜ､これほどまでに程度の悪いチャネリングが、世界的なベストセラーになったのでしょうか。それは従来のチャネリングの場合と同様、うまく売り出せば大きな金儲けになると目をつけたアメリカの大手出版社が、人為的にベストセラーに仕立て上げたからです。精神世界に関心を持っている人々にとっては、『神との対話』に出てくる一部の霊的真理は、素晴らしいものに映ることでしょう。それによって人々は、『神との対話』のすべてが正しいものであるかのような錯覚にとらわれてしまうことになります。こうした読者の霊的真理に対する無知と好奇心が相まって、『神との対話』はヒット作品となったのです。

『神との対話』を、スピリチュアリズムの「霊的真理」と対比させながら見ていくと、その内容の多くが嘘と偽りの連続であることにすぐに気がつきます。と同時に『神との対話』は、内容の素晴らしさではなく、単に商業主義的手法が巧妙であったためにベストセラーになったものだということがよく分かります。『神との対話』は、世間一般に流通して

いる低俗なチャネリングやニセ霊界通信、あるいは新新宗教における教義と同様のものなのです。そうした偽物の中には、真理と一緒に、まことしやかな嘘が盛り込まれています。それによって人々は騙(だま)され、結局、真実の道から遠ざかっていくことになるのです。

内容のあまりのひどさ

『神との対話』は、このニューズレターで示した高級霊による通信の条件から、すべて外れています。スピリチュアリズムの霊的真理と比較するまでもなく、その内容のひどさは一目瞭然です。

今ここで『神との対話』の中身を、先に述べた「高級霊訓の 13 の条件」と一つ一つ照合して批判するつもりはありません。あまりにも程度の悪い内容を前にすると、いちいち取り上げる気にはなれません。もし皆さん方の中に関心のある方がいらっしゃるならば、そうした作業はその方にお任せすることにします。

低級霊の関与と、潜在意識の混入

こうした内容の低俗さの原因は、通信を送ってくる霊が“低級霊”であるという一言に尽きます。またこの本には「低級霊の関与」と同時に、「霊媒の潜在意識の混入」が見られます。バシャールの場合にもそうであったように、チャネラーの潜在意識に内在している知識が多分に混じり込んでいます。

バシャールのチャネラー（ダリル・アンカ）はニューエイジについてよく勉強し、多くの知識を持っていました。そのため通信内容は一見、知的レベルの高いもののように映ります。それに比べ『神との対話』のチャネラーは、それほど知性的でもなく、知識も乏しいために、通信内容が知性を感じさせないものになっています。同じニセ通信であっても、チャネラーの知性の差が歴然としています。

神が直接、通信を送る？

霊界通信について少しでも知っている人ならば、神が直接、通信を送ってくるようなことはあり得ないと考えるのが常識です。ウォルシュに自動書記をさせ、質問の答えを送ってきたのは神ではなく、“霊”であることは今さら言うまでもありません。『神との対話』のチャネラーは、こうしたごく当たり前の霊的な判断さえもできず、通信内容をそのまま鵜呑みにし、神からの返事が得られたと思っていたのです。それほど霊的事実に対して無知であったということなのです。お粗末と言えばあまりにもお粗末です。

しかし、そうした彼にも、やがて神なるものの実態が明らかにされるようになります。それまで神と思っていた相手が、実は創造主たる神ではないことが、神を自称してきた霊自身の口から語られます。（『神との対話』普及版㈪ 13 章・201 ～ 203 頁）

それを聞いてウォルシュはびっくりし、神に詰め寄ります――「私は本当の神と話していると思っていました。神の中の神です。トップ、ボスですよ」ここで初めて、通信を送ってきたのが本当の神でないことが分かったのです。これには、さすがのウォルシュも驚いて「神との対話」をやめると思いきや、依然として滑稽な対話は続くことになります。これまで騙されてきたことに懲りる素振(そぶ)りもありません。神の名を騙(かた)る相手は、その後も以前と同じように、まるで神のごとくのポーズで語り続けます。

この一連のことから判断すれば、通信を送ってきたのは、程度の悪い低級霊であることは明らかです。ウォルシュがそれに気がついて当然なのですが、不思議なことに、その後も延々と「神との対話」が続いていきます。ここまでくると、もはや論外としか言いようがありません。

典型的な低俗チャネリング

霊的真理を知らない人が、この手の霊界通信に騙されるのは致し方がないとしても、スピリチュアリズムに導かれ「最高の霊的真理」を知った者が、その実態を初めから見抜けないとしたら残念なことです。

いずれにしても『神との対話』は、スピリチュアリズムから見たとき、全く価値のないニセ霊界通信です。それどころか無知なチャネラーが低級霊に弄(もてあそ)ばれ、からかわれているやり取りを本にした、くだらないものに過ぎません。まさに「典型的な低俗チャネリング」と言うべきものです。

２つのＴＶ番組を見て
“たけしのＴＶタックル”と“ここが変だよ日本人”

１ ‖ たけしのＴＶタックル

ついついＴＶ局の作戦にはまって

何カ月かに一度の、“たけしのＴＶタックル”を楽しみに見ています。この番組は、霊魂・超能力・宇宙人･予言といったテーマを中心として､「肯定派」と「否定派」が激しい論戦をするというものです。霊魂や超能力をめぐってのバトルが行われるとなれば、スピリチュアリストとしては見逃すことはできません。（＊たけしのＴＶタックルは、今世の中で話題になっているテーマを取り上げ意見を闘わせる番組で毎週放映されていますが､霊魂や超能力についてのバトルは数カ月に一度です。）

まず最初に、証拠ビデオ（？）が流され、それに否定派が反対意見を述べるという形でバトルの火ぶたが切って落とされます。次に、その意見に対して肯定派が猛烈に反論します。こうして論争が続いていきます。否定派の代表は、早大教授の「大槻義彦氏」とタレントの「松尾貴史さん」です。肯定派の代表は、元たま出版編集長の「韮澤潤一郎氏」と超能力研究家の「秋山眞人氏」です。これらの人達がレギュラーメンバーとして毎回参加します。

この番組の製作者であるＴＶ局にとっては、何より高い視聴率を上げることが目的です。肯定派・否定派のどちらが勝ってもいいのであって、視聴者が喜ぶような激しいエキサイティングなバトルをいかに演出するかが問題なのです。したがって片方だけが優勢では困ります。見ている側が、ハラハラ・ドキドキするような白熱した番組になることが大切なのです。

大槻教授が、わけの分からないようなケチをつける（大槻は何と霊性が低いやつなんだ。見ているだけで腹が立つ）――肯定派が大槻教授に反論する（そうそう、そうなんだ。大槻教授、分かったか）――再び大槻教授の反論（教授は本当にいやらしいやつだ。死んだら間違いなく地獄行きだ！）

こうしてＴＶを見ている私達は、毎回ＴＶ局の思惑どおりにはめられていくことになります。番組を楽しみに待っている私などは、初めからＴＶ局の作戦にまんまと乗せられていることになります。ＴＶ局にとっては、まさにもってこいの“カモ”なのです。そうとは知っていても悲しいかな、つい見てしまうのです。

“さらし者”にされる気の毒な超能力者達

この番組を見ていて心が痛むのが､スタジオで“さらし者”にされる超能力者達です。肯定派は、超能力存在の強力な証拠として、スタジオに超能力者を連れてきます。否定派の目の前で事実を見せつけ、鼻をへし折ってやろうとするのです。ＴＶ局側はスタジオでの実演に対してそれなりの公正を期す配慮をしており、真偽を見極めるための実験環境・実験条件としては問題ありません。

さて、スタジオで行われる実演を客観的に見ている限り、彼らの超能力は明らかに本物と言えます。どう見ても、インチキではありません。

ところが否定派は、言いがかりとしか思えないような理由を並べ立て、決してそれを認めようとしません｡あげくの果てには無理難題と言うべき要求を、いきなり超能力者に突きつけるのです。　そもそも

「超能力」を認めない否定派の連中には、それが周囲の状況によって左右させられるデリケートなものであることが分かっていません。また「超能力者」といっても、人によってその能力には差があることを全く理解していないのです。彼らには、ただケチをつけて目の前の現象を否定しようとする考えしかありません。何が何でも、「インチキの可能性がある」と主張したいのです。

例えば「透視能力」の場合、被験者（超能力者）がこれまで行ったことがない場所について、そこにある建物の特徴や全体の風景をある程度まで正確に言い当てたとするなら、普通は、それだけで間違いなく「透視能力がある」と認められることになります。しかし否定派は、透視内容が100%実際と一致しなければ「インチキだ」と言うのです。まるで写真で撮ってきたように細部にわたるまで一致していない限り、決して事実とは認めようとしません。

そうした否定派の態度が間違っていることは、まともな判断力を持った人には一目瞭然です。インチキだと決めつける方が、よほど不自然で無理なことなのです。全く何の情報も与えられないところで70%も言い当てているのに「すべて嘘（うそ）だ」と言うのですから、あまりにもおかしな話です。一度も行ったことのない場所の様子を70%も当てたとするなら、「透視能力がある」と思うのが当たり前なのです。いずれにしてもこうした形で、スタジオに来た超能力者達に無理難題をふっかけて困らせるのです。

それを見ていると、19世紀末～20世紀初期の心霊研究時代に、心霊現象を否定する科学者達が霊能者に向けた非道で執拗な攻撃を思い出します。もっとも否定派の連中の、品性の劣る言動がなければＴＶの視聴率は稼げませんから、それも仕方がないと言えるかも知れません。また出演した超能力者達も、それなりのギャラをもらっていることでしょうから、不当な言いがかりも甘んじて耐えなければならないのかも知れません。

実験に取り組む超能力者達は皆、真剣そのものです。それに対してスタジオの雰囲気はまるで遊び感覚で、超能力者が精神統一をしている脇で、ふざけたり、からかったり、ジョークを言って笑い合っています。こうしたＴＶ局側や番組の司会者（たけし）達の、無神経さ・配慮のなさに腹が立ちます。どうしてもっと静かで精神統一しやすい雰囲気をつくってあげないのかと、抗議したくなります。ひどい環境の中で――「さあ、お前の能力を見せろ」では、参加した超能力者に失礼です。これでは実演に失敗したとしても仕方ありません。こんな見世物のような番組に出なければよかったのにと、つい同情してしまいます。

印象に残った決定打！

とは言っても、参加した超能力者が毎回、実演に失敗したということではありません。いつも否定派に、やり込められていたわけではありません。否定派は、何を見せつけられても難癖をつけることしかしませんが、時には否定派も、否応なく現象の真実性を認めざるを得ないようなこともありました。否定派が、無理やり粗探しをしてインチキの口実を見つけ出そうとしても、どうしてもできなかったケースがあったのです。

その一つが、長野県の男性（綾小路鶴太郎氏）による「スプーン曲げ」の実演でした（2000年10月2日放映）。男性は、大槻教授の目の前30cmのところで、何度も複雑なスプーン曲げをして見せたのです。同席したマジシャン（ナポレオンズ）も、トリックでないことを認めました。さすがの大槻教授も、目の前に突きつけられた現実に反論することができず、それが事実であることを認めました。そして否定派の連中が、こぞって拍手を送るというクライマックスで番組は時間切れになりました。

ＴＶを見ていた視聴者にとっては、「さあ、これからが見ものだ」と思っていた矢先に、番組が終わってしまったのですから、これには大変な不満が残ったはずです。大槻教授はかねがね――自分の目の前で超能力を見せたら、いつでも大学に辞表を提出する」と公言していましたから、本当はこの時、彼は大学を辞めなければならない状況に立たされていたのです。

私を含め大半の視聴者達は、次回の番組での展開を楽しみにして、ひとまずＴＶ局の思わせ振りな演出を我慢することにしました。次回のバトルでは、この「スプーン曲げ」の事実を取り上げて、肯定派が攻勢に転じるようになるだろうと期待することにしました。ところが何カ月か後に行われたバトルでは、肯定派からこの問題が持ち出されることはありませんでした。肯定派の無能さか、またはＴＶ局側からストップの要請があったためなのかは分かりませんが、せっかくのバトルの進展が見られず、番組はうやむやのままで終わってしまったのです。

＊この綾小路氏は、2001年12月31日に別の番組に出演し、たけし達の前で再び見事なスプーン曲げを披露しています。最近になってミスター・マリックなどのマジシャンがスプーン曲げに挑戦していることを意識し、その番組では、自分のスプーン曲げが決してトリックではないこと、マリックとは格違いのものであることを証明して見せました。

さらに印象的だったのは、12歳のロシアの少女によるスタジオでの「透視実験」でした（2002年4月1日放映）。この少女に、大槻教授の書いた専門家にしか理解できないような物理式を透視させることになりました。少女がアルファベットに馴染(なじ)みがあることなどが幸いして、完璧とは言えないまでも、誰が見ても透視が事実であることを認めざるを得ないような素晴らしい結果が出ました。

これにはさすがの大槻教授も脱帽して、たけしの、「これでは辞表とまではいかなくても、休職だね」の声に、教授は――「4月から講義をしません」と宣言することになりました。果たしてその通り実行したのでしょうか？　もし教授が、これまで公言していたとおり本当に辞表を出したとしたら立派なものですが……。

この他にも、印象的だった実演がありました。実演時期は先の2つよりかなり以前になりますが、中国の2人の女性が、スタジオで「透視実験」に臨みました。否定派の「野坂昭如(あきゆき)氏」の書いた文字を透視するというものでした。その結果、野坂氏は彼女達の能力の正当性を認め、否定派の仲間の2人（大槻・松尾氏）と意見が対立するというおかしなことになりました。

ここに挙げた以外にも、印象に残った実演は数多くあります。そのいずれもが、頑固な否定派を前にして「超能力の事実」を見せつけるのに十分なものでした。それによってＴＶを見ていた大勢の人々に超能力の実在を知らせることになったのは、大きな意義がありました。

スピリチュアリズムは、どちらの味方か？

ここで少し視点を変え、この番組を、スピリチュアリズムの立場から見ていくことにしましょう。スピリチュアリズムにおいては、霊魂や超能力の存在を頭ごなしに否定する大槻教授は悪玉の代表のように思われています。彼には悪玉の親分のイメージが定着しています。

しかし、この番組に関する限り、彼をいちがいに悪玉と決めつけることはできません。一般的には、スピリチュアリズムは当然、肯定派の味方であると思われるでしょうが、そうではありません。この番組に参加している肯定派の連中は、およそスピリチュアリズムからは懸け離れた、むしろ敵・反対者と言った方がいいような人達ばかりです。

この番組で取り上げられているテーマは――「心霊関係（霊魂と超能力）」「宇宙人」「予言」の3つに分けられます。この3つのテーマのうち、スピリチュアリズムでは霊魂と超能力の存在は認めますが、宇宙人と予言は認めません。「そんなことはない。スピリチュアリストの中には宇宙人の存在や予言を認める人もいる」と思われる方がいるかも知れませんが、それは、スピリチュアリズムを正しく理解していないところからの見解なのです。シャーリー・マクレーンに代表される軽々しいニューエイジャー達は、宇宙人や予言の類(たぐい)を信じますが、スピリチュアリストはそうであってはなりません。

つまり番組で取り上げられている3つのテーマのうち2つについては、スピリチュアリズムは大槻教授と同じ立場・見解に立っているのです。「宇宙人」や「予言」についての大槻教授の非難は、スピリチュアリズムとしても大賛成なのです。

宇宙人と予言については、否定派に軍配！

宇宙人肯定派・予言肯定派のあまりの内容のひどさについては、ＴＶを見ている大半の方々はご承知のはずです。1999 年 7 月に関する“ノストラダムスの予言”が外れても、なおこじつけとしか言いようのない屁理屈を並べて、「やはり予言は、これから当たるのだ」と主張するについては馬鹿馬鹿しくて聞いていられません。また韮澤元編集長の、「宇宙人の住民票を持っているが、今は見せられない」との意見に至っては、最早まともな議論が成り立たないのは誰の目にも明らかです。狂信者が、自分達だけは正しいと思い込んでいるのと全く同じことなのです。番組も回を追うごとに、宇宙人肯定派・予言肯定派の程度の悪さだけが、浮き彫りにされるようになってきました。

こうした状況をＴＶ局側が察知してか、正面きって肯定派と否定派を議論させる時間が少なくなってきています。宇宙人と予言についての議論を取り上げるウェイトが、以前と比べて軽くなっているのがよく分かります。「宇宙人」「予言」という 2 つのテーマについては、明らかに否定派の勝利と言えます。いくら興味本位の番組であっても、度を超したデタラメの主張を続ける人達を出演させていては、番組が成り立たなくなるのは当然です。

結果的に、真実なものと真実でないものに明白に色分けされるようになり、よかったと思います。肯定派は、「霊魂や超能力」といった心霊に関するテーマだけについて議論すれば、このような惨めなことにならずに済んだのです。

秋山眞人（まこと）氏の“致命傷”

肯定派のあまりにもひどい顔触れの中で、唯一まともな感覚と知性を持っていると思われるのが「秋山眞人氏」です。彼だけが常に、大槻教授とかみ合った議論をしています。その点において最も好感の持てる人物であり、スピリチュアリズムなど心霊問題の肯定派にとって、頼もしい存在と言えます。

しかし、この秋山氏は数年前に、「宇宙船に乗り込み、宇宙人と会った」というとんでもない内容の本を出版しています。スピリチュアリズムから見ればこれは明らかな間違いであり、彼の長所をすべて台なしにしてしまうほどの“致命傷”と言えます。否定派がこの弱点を突かなければいいのにと危惧（きぐ）していましたが、案の定、最新のバトルではそれが取り上げられてしまいました。彼は防戦一方に追い込まれ、「あれは夢である」といったみっともない言訳（いいわけ）に終始していました。本当に馬鹿げたことを本にしてしまったものです。

「宇宙人との会見は、夢の中の出来事だった」などと言い逃れできる問題ではありません。この傷は、今後もずっとついて回ることになるでしょう。彼が優秀な人材で、スピリチュアリズムにとっても頼りがいのある人間だけに、実に残念なことと言わざるを得ません。韮澤元編集長の宇宙人の住民票と同様に、このバトルの中では、まさに致命傷となっています。

「大槻教授」は、スピリチュアリズムの敵か？

霊魂の存在や超能力をかたくなに否定し続ける「大槻教授」は、スピリチュアリズムの敵とも言える人物です。しかし見方を変えれば大槻教授は「宇宙人」や「予言」、あるいは「ニセ霊能者」というスピリチュアリズム内部の敵を叩いてくれる、ありがたい存在なのです。内部の敵は外部の敵よりもタチが悪くて厄介です。スピリチュアリズムを語りながら、その一方で宇宙人の存在を認めることは、大きな弊害をもたらします。そうした“内部の敵”を非難する大槻教授のような“外部の敵”は、まさにスピリチュアリズムにとっては、ありがたい人間と言えます。

スピリチュアリズムでは――「自分の良心に忠実に従う生き方が大切である」と教えています。大槻教授を見る限り、本当に心の底から「霊魂などない」と信じているようです。霊魂の存在を信じられないことは気の毒としか言いようがありませんが、彼が自分の良心に忠実に生きていることは、誰の目にも明らかです。霊的事実を全く認めることができないというのは、「霊性が低い」という単純な理由によるものです。大槻教授は霊性は低いけれど、低いなりに人生を誠実に生きていると言えるのです。

それに対して、スピリチュアリズムを自らの利益と名声のために悪用する「ニセ霊能者」はどうでしょうか。口先では霊魂や超能力の実在を主張します。しかし現実の生活では、霊的真理を悪用して、人々を騙し続けています。その罪は霊界において免れることはできませんし、必ず後悔の中で償わなければならなくなります。自分の良心に反する行為、悪いと知りつつ行ったことは、いつか咎めを受けなければなりません。こうした「ニセ霊能者」と、大槻教授のようなスピリチュアリズムを否定する「正直者」とでは、神はどちらを善しとされるでしょうか？

大槻教授は、霊魂や超能力などないと心の底から思っているのです。だから公然と、「それが事実なら辞表を出す」とまで言い切っているのです。心霊世界を否定することは霊的事実から見て明らかに間違っていますが、自分の信念に忠実であろうとすることにおいて、動機は純粋なのです。それゆえに死後、彼が霊的な責めを負うことはないと思われます。嘘と知りつつ自分の利益のために人々を騙し続けるニセ霊能者は、その動機が不純です。人間的価値において、大槻教授に大きく劣るのです。

スピリチュアリズムでは――「何を信じるのか、何を語るのかではなく、何をするのかが重要である」としています。スピリチュアリズムの霊的真理を語りながら罪を犯す人間は、残念ながら多いのです。こうしたスピリチュアリズムの“内部の敵”を叩いてくれる大槻教授は、間接的にスピリチュアリズムの味方とも言えるのです。

2 ‖ ここが変だよ日本人

ＴＶで見せた「気の威力」

たけしのＴＶタックルと同様､印象的だったのは、“ここが変だよ日本人”での気功師による気の実演でした。この番組は、日本に滞在する外国人をスタジオに呼び、日本に対するさまざまな意見・批判を述べさせ、議論するというものです。（＊この番組は今年の３月で打ち切りとなり、現在は放映していません。）

番組の中では数回にわたって気功の実演が行われ､ここにも否定派代表の大槻教授が出演しました。日本・韓国・中国から、名うての気の達人・気功師が次々とスタジオに招かれ、番組に参加していた外国人を実験台にして気功を実演し、「気の威力」をあますところなく見せてくれました。特に気の力による“遠当(とおあ)て”の実演には目を見張るものがあり、スタジオにいた参加者は皆、唖然(あぜん)としていました。（＊遠当てとは、離れた所にいる人間を気の力で操るという気の技で、時には数十人の人間をいっせいに操ることもできます。）

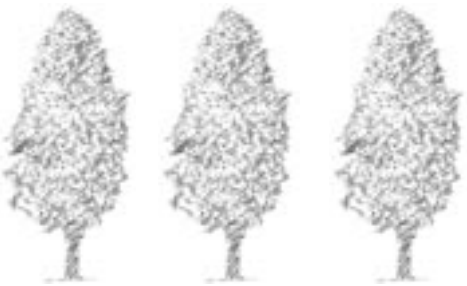
否定しがたい事実を目の前にして、スタジオにいた者ばかりでなく、ＴＶを見ていた多くの人々も、気の威力に驚いたはずです。それは「サイキック能力の存在」を、ＴＶという現代のメディアによって国民に知らせたことであり、スピリチュアリズムにとっても実に意義のあることでした。20 世紀初期の､「科学者による心霊現象の研究」に匹敵する意味を持っていると言えるかも知れません。当時は、一部の科学者だけが目にすることのできた「超能力現象」が、ＴＶを通じて多くの国民の前に示されたことは、“唯物論”との戦いにおける大きな貢献と言えるでしょう。

大槻教授に通用しなかった「気の威力」

ところがこの番組は、今述べた目を見張るような気の実演だけで終わったのではありません。そうした実演の後に、さらにおもしろい展開が見られることになりました。驚愕(きょうがく)するような素晴らしい実演に続いて、大槻教授を実験台にして同じような実演がなされ、それが番組に、新たな別の問題を提起することになったのです。

例によって大槻教授は、気功の威力などは認めようとしません。いくら目の前で外国人が気の力によって倒され、操られ、振り回される事実を見せつけられても､それは「ただ疲れているだけだ」と言って認めようとしないのです。そこで教授自らが実験台となって、気を受けることになりました。これが大槻教授のいいところで､参加した気功師の挑戦を、毎回一人で受けて立ったのでした。

スタジオにいた人々、ＴＶを見ていた人々全員が、きっと先ほどと同じような現象が教授にも起こり、教授は倒されたり、操られるようになるだろうと思っていたはずです。気功師は、渾身(こんしん)の力を振りしぼり、教授に気を投射しました。誰もが、すぐに教授は跳ね飛ばされると思って固唾(かたず)を呑んで見ていました。そうしてしばらく沈黙の時が過ぎますが、教授は倒れません。必死に倒れまいと戦っているようにも見えます。体に微妙な反応らしい動きも見えますが、なかなか倒れません。そのうち気功師は、「できない」と敗北宣言をしました。教授にとっては、まさに気功の嘘を暴いた誇らしい勝利の一時(ひととき)でした。こうして日本・韓国・中国の気の達人との直接対決は、ことごとく大槻教授の勝利に終わったのです。

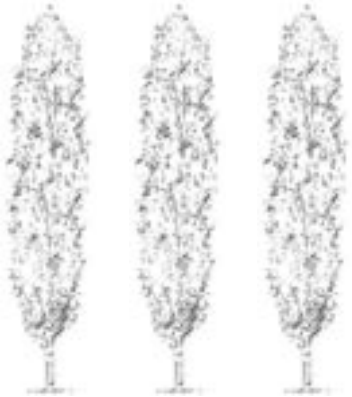


気の実演は、“やらせ”か“インチキ”だったのか？

この場面を見ていた人々は、先ほど投げ飛ばされ､操られた 10 人の外国人は“さくら”だったのか、あれは“やらせ”だったのかと思ったに違いありません。大男を含む 10 人もの人間を一度に操ったのが事実なら、それほど大柄でもない大槻教授一人を倒せないはずがないと考えて当然です。おそらくＴＶを見ていた大半の人々は､さっき見た「気の威力」とは一体何だったのか分からなくなったはずです。あの実演は、嘘か本当か、信じていいものかどうか分からなくなり、中途半端な気持ちだけが残ったと思います。

気の実演が明らかにしたこと、気の実演の意味するもの

唯物論者や否定派の人々は、スタジオにおけるこの一連の出来事によって､「気功のインチキ性」が暴露され、証明されたと思ったことでしょう。否定派は､「気の威力」などもともとあるはずはなく、嘘かせいぜい暗示の類に過ぎないと考えています。では、スタジオで参加者が見せた反応は、“やらせ”か“インチキ”だったのでしょうか。そうではありません。現実に気功師によって倒され、操られたのです。



この一連の気の実演を客観的に述べるならば、次のようになります――「気功の威力は絶大で、一度に何人もの人間を、手を触れずに倒したり、操ることができる」ということ。それと同時に､「大槻教授のように、気の威力が及ばない人間もいる」ということです。ＴＶの実演で明らかにされたことは、この 2 点なのです。気の威力は事実ですが、気の威力が効かないケースもあるということなのです。

こうした実演の結果を、ありのままに認めることができる人ならば――「では、どんな人間に気功は効力を発揮し、どんな人間には効力を発揮しないのか？」という新たな疑問を持つようになるはずです。「気の威力は嘘(うそ)か真(まこと)か」ではなく、どうしたら気の威力は発揮され、どうしたら発揮されないのか、という方向に問題意識が移っていくことになるはずです。

どうして大槻教授を倒せなかったのか？

なぜ、大槻教授には気功が効かなかったのでしょうか。結論を言えば、気功が威力を発揮するのは、相手に受け入れる気持ち・受け入れ態勢があるときに限られるという原則があるからなのです。別の言い方をするなら、気を送る者とそれを受ける者との間に､ある種の“共鳴性”が必要だということです。徹底して疑いを持ったり、頭からそんなものはあるはずがないと決めてかかるような人には、気功の力は及ばないのです。そうした人には気の影響力は素通りしてしまい、“のれんに腕押し”といった状況ができてしまうのです。

気の力で相手を倒すには、相手が気功の威力に関心を持っていたり、あるいは好奇心を示すなど、それなりの受け入れ態勢が必要となります。したがって公開実演などでは、影響を受けやすい人間を最初のモデルにして実演し､それを見ていた他の人間に、自然に関心や好奇心を起こさせるように仕向けるのです。信じがたいといったようなレベルの反応でもいいのです。実演と意識の方向性がかみ合えばいいのです。驚きがあれば、なおいい状態ができることになります。なかにはそれを見るだけで信じるよう

な人もいますが、そうした人は最も気の影響を受けやすいのです。

初めは否定的だった人も、目の前で事実を見せつけられると、自分のうちに納得できる説明（否定理由）を見い出せない限り、不安になり、かたくなに構えていた心にスキができるようになります。このようなとき次々と実演を見せられると、大半の人は抵抗する力を失い始めます。“潜在意識”は、そうした状況下で「気の威力」を受け入れようと動き出します。そしていつの間にか、自分から気の威力に簡単に反応するようになってしまうのです。

ＴＶに出演した気功師は、最初に心の受け入れ態勢･気の共鳴状態をつくるために、相手を直立させ、これを意図的に押してぐらつかせるようなことを繰り返しています。これは気の力に反応させやすくするための呼び水のようなものです。気の実演におけるこうした状況は、実は「催眠術」と全く同じなのです。相手に暗示を受け入れる姿勢がない限り、催眠術は成功しません。催眠術師がいくら必死に暗示を与えても、相手が暗示に意識を向けない限りコントロールはできないのです。

もし皆さんが催眠術にかからないようにするためには、相手の暗示に耳を傾けなければいいのです。てっとり早いところでは、耳栓をして催眠術師の声が聞こえないようにしたり、催眠術師と視線を合わせないようにして、あらぬ方向を見ていればいいのです。あるいは相手が何を言っても、自分の頭の中で別のことを一生懸命考えていればいいのです。要は相手の言葉に意識を合わせないということが肝心で、相手が突如、指を目の前に突き出しても動じず、「この人の指は汚いなあ」などと、とっさに指の観察に意識を切り替えてしまうのです。こうして意識を徹底してずらせば、そのうちに催眠術師は疲れ果てて続けられなくなります。

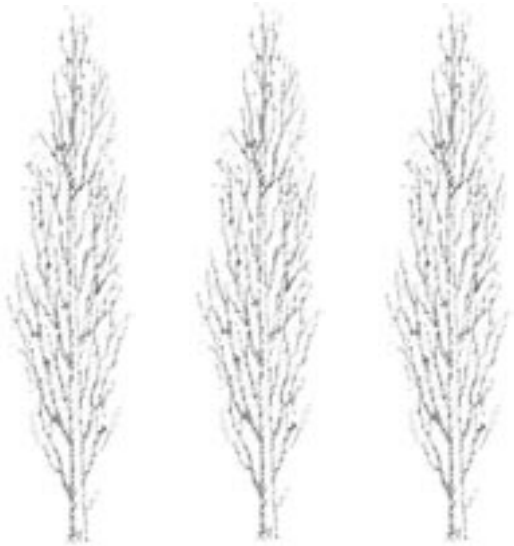
気功も催眠術も、サイキックレベルの世界に係わる以上、相手との“共鳴性”が決め手となります。大槻教授は、そのあたりのコツを敏感に察知していたのでしょう。必死に自分の心の世界を崩さないようにしている様子が見られました。もちろん心の底から「そんなものは、あるはずがない」と思う堅い信念があればこそ､自分が試される場に置かれても、何とか心を維持できたのです。これは、やはり信念が大きな力を持つことを示しています。

日本の気の行者と中国の気の達人が直接対決し、日本の行者が跳ね飛ばされて骨折してしまいました。気の威力を常に高めようとしている人間同士が気をぶつけ合うと、必ずこうした結果になります。普通の人以上に気の威力を知っているため、よけいに反応が大きくなるのです。激しい剛と剛とのぶつかり合いの様相を呈します。10 人の人間を動かす力が堅い塊となって、そのまま相手に投げかけられるのと同じことになるのです。

もし一方が、相手と気がかみ合わないように意識を別の方向に向ければ、相手を倒すことはできませんが、自分も倒されずに済むことになります。賢明な闘い方は、初めに相手と意識を相応させないようにし、相手だけに力を振り絞らせ、疲れさせることです。相手が疲れてきたら、それから相手に向けて気を送るようにするのです。そうすれば、いかに相手が強力な気の達人でも、必ず勝てるようになります。「柔よく剛を制す」とは、まさにこのことなのです。気の達人や行者にはプライドがあるため、初めから全力で相手に立ち向かおうとします。そのためそうした者同士の対決は、どちらかが跳ね飛ばされるまで収まらないようになっています。気功とはそういうものなのです。

話は少し変わりますが、昔から「敵を呪い殺すこと（呪詛）」が行われてきました。ワラ人形にクギを打ち込むという呪術も、この一種と言えます。これらはいずれも「サイキック能力」を用いた方法で、気功と同じような性質を持っています。つまり呪詛の相手が、こうしたことを信じている人間であってこそ力を発揮するのです。昔は“御霊信仰”が社会の隅々まで浸透していたため、誰もがそれを事実として受け入れ、信じ、恐れていました。そのために、呪詛やワラ人形が確かな力を発揮することができたのです。

しかし現在のように、呪詛など頭から馬鹿にし否定するような時代では、同じようなことをしても、相手がよほど霊的に敏感でない限り、効き目はほとんど現れません。低級霊が関与しない限り、自分のサイキック能力だけでは、効果が少なくなっているのです。



シルバーバーチの故郷（ふるさと）を訪ねて

シルバーバーチゆかりの地を訪ねたいという願いがかなって、初春のロンドンに行ってきました。前もってトニー・オーツセンに連絡したところ、一日時間をさいて案内してくれるということになりました。ロンドンで一番古いパブでの昼食をはさみ、トニーの車で、ＳＡＧＢ（大英スピリチュアリスト協会）本部、ツー・ワールズのオフィス、バーバネル夫妻が住んでいたアパートを案内してもらいました。

ＳＡＧＢでは、トニーがセミナーの専属講師をしていることもあり、内部のさまざまな部屋を見せてもらうことができました。ツー・ワールズのオフィスは、テムズ川を見下ろす古い石造りの建物の中にありました。以前はコーヒー豆を売っていた会社の一室を、安い家賃で借りているそうです。

今回の訪問で最も楽しみにしていたのは、「シルバーバーチの交霊会」が行われたバーバネル夫妻のアパートです。トニーがそのアパートを訪ねるのは、1981 年にバーバネルが亡くなって以来、20 年ぶりとのことでした。アパートは、ロンドンの閑静な住宅地にあり、すぐ近くにはビートルズファンにとってのメッカ「アービーロード・スタジオ」があります。

写真は、バーバネル夫妻が結婚してから死ぬまでの約 50 年間住んでいたアパートです。英国ではこの種の住居をフラットと呼んでいます。アパートの２階、向かって右側の一角がバーバネル夫妻の住居で、1930 年代からハンネン・スワッファーが亡くなる 1962 年までは、交霊会は彼の自宅で行われていましたが、スワッファーの死後は、バーバネルのアパートで開かれるようになりました。そしてバーバネルが死去するまでの 20 年間、交霊会はこのアパートで続けられたのです。

シルバーバーチの交霊会が行われたアパート

現在その住居には、スピリチュアリズムとは縁もゆかりもない人々が住んでいます。かつてここで「人類史上最高の交霊会」が行われたことなど、全く知る由もありません。人類全体の宝ともいえる霊界通信が送られてきた場所に、今はスピリチュアリズムとは何の関係もない、シルバーバーチの名前さえ知ることのない人々が住んでいることに、不思議な感覚を覚えました。トニーも、交霊会に参加していた自分でさえ足が遠のいていたアパートに、わざわざ日本から訪問者がきたことに感慨深い様子でした。

運良くアパートの住人が帰ってきたため、アパート内に入って、バーバネルの住居の玄関ドアーの前まで歩いていくことができました。トニーは、日本のスピリチュアリストに向けてのメッセージとして、このアパートの一室に、かつて世界各地から多くの人々が訪れたことを述べ、交霊会の様子を説明してくれました。

トニーは、バーバネルの最後についても語ってくれました。それによると、バーバネルは亡くなる2週間前に旅行に行って体調を崩し、それがもとで心臓マヒで他界することになったそうです。バーバネルは最後は現代医学の医者にかからず、ハーブを用いる自然療法医の治療を受けたということです。

普段のバーバネルは健康体で、ほとんど病気をすることがなかったのですが、妻のシルビアは呼吸器系が弱くて煙草の煙を嫌っており、バーバネルは自宅では、できるかぎり煙草を吸わないようにしていたそうです。またバーバネル夫妻はベジタリアンで、ごくたまに魚を食べるといった食事を長年続けてきました。

別れ際にトニーは、また素晴らしいプレゼントをくれました。すでにニューズレター16号で、トニーから贈られたバーバネルの形見の古いアルバムを紹介しましたが、今回はさらにもう一冊、別のアルバムをくれたのです。

それは1930年代から1950年代にかけてのアルバムで、「シルバーバーチの交霊会」が最も充実していた時代のものです。この間には第2次世界大戦があり、交霊会を維持することが、きわめて困難な時期でもありました。ロンドンもドイツ軍の空襲によって戦禍にさらされましたが、交霊会は休むことなく続けられました。その当時の様子が、『シルバーバーチの霊訓』の中に詳しく述べられています。(＊潮文社発行『シルバーバーチの霊訓』第3巻・1～2章参照)

私達はトニーに、「大切な形見のアルバムを手放してしまって、本当にいいのですか？」と尋ねました。するとトニーは――「バーバネル夫妻の思い出は、自分の心の中にしっかり刻み込まれていますから、どうか気にしないで受け取ってください。このアルバムを皆さん方が喜んでくださることが分かりますから、ぜひそうしていただきたいのです」と言ってくれました。

そしてさらに、バーバネルが生涯を通じて愛用していた木製のペン皿もくれたのです。サイキック・ニューズ社のバーバネルのデスクの上に、いつも置かれていたものです。

バーバネル夫妻の古いアルバム

バーバネル愛用のペン皿

トニーは、もう一つ貴重なプレゼントをくれました。それはティーカップとソーサー（受け皿）・ケーキ皿のセットで、日本を発つ前から――「今度、皆さんがイギリスにいらっしゃったら差し上げます」と約束してくれていたものでした。写真はそのティーセットです。これまで何人かの方々に分け与え、あと数組しか残っていない内の一セットをくれたのです。

このティーセットは、「シルバーバーチの交霊会」が終わった後だけに使われた特別なものです。トニーの言うところによれば、このティーセットは1930年代のもので、ハンネン・スワッファーやメアリー・ピックフォードなどの有名人も、それでお茶を飲んだということです。（＊メアリー・ピックフォードは、米国無声映画時代のスター女優で、シルバーバーチの交霊会にも招かれています。『シルバーバーチの霊訓』第2巻・5章参照）

このティーセットには、“白樺”の絵が描かれています。そのため皆は、これを“シルバーバーチ”と呼んでいました。このティーセットは、シルバーバーチからバーバネル夫妻へのプレゼントだと、皆が信じていたそうです。

日本語版『シルバーバーチの霊訓』第1巻の英文原書は、アン・ドゥーリー編の『Guidance from Silver Birch』ですが、この原書の表紙にはティーセットと同じ白樺の絵が描かれています。トニーが専門家に依頼して、ティーセットの図柄をそのままコピーしてもらったものです。

“シルバーバーチ”と呼ばれていたティーセット

私達は、これまでトニーから贈られた貴重な品々は、日本のすべてのスピリチュアリストに対するプレゼントだと思っています。長年、トニーの手元にあったシルバーバーチゆかりの品々を、今次々と私達に与えてくださるその背後に、シルバーバーチをはじめとする多くの高級霊の働きかけを強く感じています。日本国内だけでなく世界各国に――『シルバーバーチの霊訓』を中心とした「本物のスピリチュアリズム」が展開することへの期待が、こうした形で示されているものと思っています。

トニーには、日本のスピリチュアリストを代表して、何度も感謝の言葉を述べました。

スピリチュアリズム・ビデオ&テープ ライブラリー

VIDEO

ビデオ『地球人類の霊性進化の道 “スピリチュアリズム”』

ー霊的真理のエッセンス・真理編ー

（価格）

「真理編・前編」２時間テープ　１本……**２０００円**

「真理編・後編」２時間テープ　２本……**３５００円**

※別途、送料がかかります。

当サークルでは、スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」を、より多くの方々に正確に理解していただくために、「真理編」のビデオを作成しました。このビデオは、膨大な真理を簡潔にまとめ、誰にでも分かりやすい言葉で説明しています。入門者にかぎらず、これまで長年「霊訓」に親しんでこられた方にとっても、驚くような新鮮さと、真理の深い理解にともなう感動を得ていただけるものと確信しています。またこのビデオは、「読書会・学習会」を進める上においても、最適の教材になるものと思います。

すでにビデオをご覧になった方々から、多くの感動と感謝の声が寄せられております。「今まで本で読み、分かっていたつもりだったけれど、このビデオによって初めて、スピリチュアリズムの一番肝心な点が明確になりました」という感想を、何人もの方々からいただいております。

本を読むのは大変だという方も、ビデオによる学習ならば、ポイントを押さえながら、一気に全体を通して学ぶことができます。スピリチュアリストにとって、「霊的真理」を理解することは最も大切なことですが、このビデオは、そのための大きな助けになるものと思います。

TAPE

スピリチュアリズム関連書籍の「朗読テープ」

「スピリチュアリズム入門」９０分テープ　４本……**１６００円**

「続スピリチュアリズム入門」

９０分テープ　５本
６０分テープ　１本　＞ 計６本 **２５００円**

「５００に及ぶあの世からの現地報告」

９０分テープ　８本……**３０００円**

※別途、送料がかかります。

これまで数多くのスピリチュアリズム関係の書物を読まれたにもかかわらず、その本質を十分理解できないままの方々が大勢いらっしゃいます。そのような方が、当サークル出版の『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』を読まれ――「初めてスピリチュアリズムの素晴らしさが分かりました。霊的真理のアウトラインが理解できました」と、感想を述べてくださっています。

そうした方々の中から、ぜひこれらの本をテープにしてほしいとの要望が寄せられておりましたが、この度、サークルのメンバーによって、『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』『５００に及ぶあの世からの現地報告』の３冊の朗読テープが完成しました。

早速テープを聴かれた方々から――「真理が心に沁みわたり、深い霊的世界に包まれるような体験をしました」「一緒に霊的サークルに参加しているようで、落ち込んでいた心が引き上げられました」といった感想をいただきました。また、「サークルの学習会でこのテープを聴くことによって、全員が霊的啓発を受け、霊的な感動にひたることができました」とおっしゃる方もみえました。

皆さん一様に、本ではなかなか得られない霊的雰囲気を、この朗読テープを通じて身近に体験されるようです。予想を超えた反応に、私達も驚き嬉しく思っています。皆さんがこのテープによって、霊的真理の正確な理解とともに、深い霊的世界にふれ、心を高めてくださることを願っています。

（※なおこのテープは、自由にダビングしていただいて差し支えありません。）

≫ スピリチュアリズム・ライブラリー ≪

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

◆スピリチュアリズム入門　(169頁)
ースピリチュアリズムが明かすー「心霊現象のメカニズム＆すばらしい死後の世界」

◆続スピリチュアリズム入門　(256頁)
ー高級霊訓が明かすー「霊的真理のエッセンス＆霊的成長の道」

◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」　(297頁)
『The Mediums' Book』　アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」　(357頁)
『The Spirits' Book』　アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆500に及ぶあの世からの現地報告　(437頁)
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』　ネヴィレ・ランダル著／小池 英 訳

◆マイヤースの通信ー永遠の大道（全訳）　(271頁)
『The Road to Immortality』　G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方（全訳）(304頁)
『Beyond Human Personality』　G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆霊訓（完訳・上）『The Spirit Teachings』(225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆霊訓（完訳・下）　『The Spirit Teachings』(260頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチは語る（443頁）
『Teachings of Silver Birch』A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓
ースピリチュアリズムによる霊性進化の道しるべー
『A Voice in the Wilderness』　トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉

◆シルバーバーチの霊訓（仮題）『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓（仮題）『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆ジャック・ウェバーの霊現象　『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著／近藤千雄 訳

◆妖精物語　『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著／近藤千雄 訳

“スピリチュアリズム・ニューズレター”について

＊このニューズレターは、「真摯にスピリチュアリズムを学びたい、実践したい」という方々のお役に立つことを願い、発行いたしております。

初めてニューズレターを希望される皆様へは、まず創刊号～５号までお送りいたします。（＊ご依頼のあったお知り合いの方へも、同様に５号までお送りいたします。）６号以降の分につきましては、ホームページで主要な内容はほとんど公開しておりますので、それをご覧になってください。

ただし当サークル出版の書籍やテープをお求めいただいた方で、ご希望があれば、６号以降の分についてもお送りいたします。また今後の発行分も継続してお送りいたします。（＊すべて無料です。）

ご不明な点は、お問い合わせください。

Spiritualism Circle

Kokoro no Dojo